6. 槍ケ岳ー西穂高岳　（昭和４５年１２月）

宮本義海

昭和４５年１１月、我々は、ＯＢ、現役の二パーティによる槍ケ槍〜西穂高岳の冬期縦走を行なうことにした。これは、昭和４０年・４１年冬の二回にわたる槍ケ岳北鎌尾根、昭和４２年冬の西穂高岳西稜に展開された冬期穂高合宿につづくものであり、又明年のアラスカ遠征合宿のトレーニングにもあてられた。

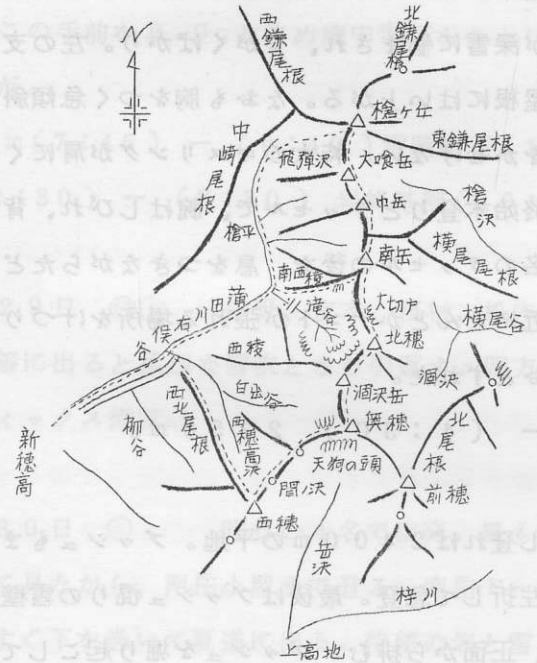
幸にも天候にも恵まれ、現役隊は南岳南西稜より北穂、奥穂を往復し、槍ケ岳経由下山、ＯＢ隊の涸沢岳西稜より、奥穂、西穂高岳西稜下山共に予定通りに行動することが出来た。

参加メンバー

ＯＢ隊	Ｌ．中野　力	現役隊	Ｌ．四方立夫
	和田徳之		苗村　元
	鈴木考尚		安沢　寛
	宮本義海		松本繁文
	山内　崇		三星善業

（但、中野、宮本は現役隊と入山し、南岳北穂高岳をへて、穂高小屋でＯＢ隊と合流）

槍・穂高周辺概念図



南岳隊（現役隊）

１２月２６日　◎　新穂高温泉にて７名（中野（ＯＢ）、宮本（ＯＢ）、四方、苗村、安沢、松本、三星）の入山届を済ませ出発する。ロープウエイができてからは、この新穂高もさわがしくなった。しかし蒲田右俣谷に入れば物静かな山道である。やっと穂高縦走への心の高ぶりを覚えるが、体の方はまだエンジンがかからないようだ。右俣谷沿いの夏径どうしにトレースが残っているが、ピッチはあまり上がらない。やっとの思いで白出沢出合に着き、昼食とする。いつもどうり、荷や雪に対する文句を並べてから出かける。そこからは案外早く滝谷出合に着いたが、取付の偵察もせずテントにもぐり込む。南岳の南西稜はただただ見上げるばかり、滝谷はなおも頭上に迫りくる。ドームやジャンダルムを想いつつ今日の一夜を過ごす。

新穂高（１０：００）ー（１４：４０）滝谷出合。

１２月２７日　◎①　藤木レリーフのすぐ左横のルンゼより取付く。アイゼンとワカンの併用であるが深雪に悩まされ、もがくばかり。左の支ルンゼに入り上部まで詰め、右手の屋根にはい上がる。なおも胸をつく急傾斜とブッシュに苦しみ遅々として高度をかせげない。特大のキスリングが肩にくい込み、トレースを踏み抜かせる。終始木登りとラッセルで、腕はしびれ、背骨は悲鳴を叫げる。現役は、ＯＢ二名のラッセルの後を、息をつきながらたどるようになっていた。２３５０ｍ付近になんとかテントが張れる場所をけづりとる。テントを張り終えると日暮がおとずれた。

滝谷出合（７：４０）ー（４：３０）２３５０ｍ。

１２月２８日　○　少し登れば２４００ｍの平地。ブッシュもまばらになったが、ラッセルは続く。左折して急登。最後はブッシュ混りの雪壁である。小休止してワカンをはずし、正面から排む。ブッシュを堀り起こして強引に登るが、ザックが引かれて苦しいピッチであった。約４０ｍでひょっこり小ピーク（２７００ｍ）に出た。ここよりブッシュはなくなり、ナイフエッヂが続く。この屋根のポイントである７０ｍの岩峰がいやに大きく見える。次の小ピークを越えナイフエッヂを辿ると、左折するところに、細く切れ落ちたコル。これにフィクスをして昼食とする。目前には北穂滝谷と大切戸、そして頭上には岩峰と、心躍るパノラマである。

フィックス通過後、屋根はやや広くなったが、クラストした急斜面となる。右手手がカール状に広がった所は、これをトラバースして中央に出てから直登する。かなり雪は硬く、足首に全体重がかかるように感じる。途中二ケ所バケツを堀り、休み休み一人づつ登った。これを登り切ると例の岩峰基部である。すぐ中央の凹角にルート工作を行うが、チョックストーンのハングをキスリングで抜けるのは難かしくあきらめる。そこで基部に若干のデポをして、中野、宮本、四方で岩峰右肩より巻くように工作を行う。バンドを斜上すると１Ｐ。次のピ

ッチで雪壁をトラバースして凹角より岩峰の頭に出る。残りの４名もこれに続いて登る。時間は容許なく過ぎ、谷間の影がどんどんせり上がる。岩峰の頭より極めて細いナイフエッヂを１Ｐ工作する。これを通過すれば西稜とのＪ.Ｐ.である。この手前をＢ.Ｃ.と決め壊中電灯をたよりに幕営する。南岳はもう目と鼻の先だ。

２３５０ｍ（７：４５）－（９：４０）雪壁直下（１０：００）－（１１：５０）昼食（１２：３０）－（２：３０）岩峰基部（１６：００）－（１７：３０）Ｂ.Ｃ.。

１２月２９日　◎①　中野、宮本、苗村、松本の四名で北穂に向け出発するが、稜線に出ると猛烈な雪吹となり引返す。四方、三星はデポ回収。中野、宮本でフィックス撤収。

１２月３０日　○　昨日の４名で出発。風もなく絶好の登山日和。大切戸を右下に見ながら、南岳小屋まで登る。南岳ドームの手前から滝谷側へ下りドームのすぐ下を巻いて夏道に出る。待望の岩と雪の世界である。忠実に夏道を辿り、ルンゼを下る。二本のハシゴを降りると切戸の底であった。滝谷側のクラストした斜面を快適に進む。思ったより雪庇の発達は小さい。北穂への登りは、夏のルート通りに取りつき、そのままリッジに上がる。リッジ上を慎重に辿り、クサリ場を登ると横尾谷側の雪壁トラバースである。不安定な雪がかぶっているので、ザイルを出し、スタカット。２Ｐ目でリッジに上がる。岩のナイフエッヂを辿ると北穂ピーク直下の雪壁である。これを一つの問題点としていたのであるが、さほどのこともなく北穂小屋に着く。南岳Ｂ.Ｃ.テントが、はるかに見えていた。ピナクルのデポを堀り起こして南峰とのコルへ下る。松濤岩の基部に雪洞を堀り、まずは落ちつく。

ＢＣ（７：２０）－（１０：５０）北穂取付（１１：０５）－（１：００）北穂。

１２月３１日　◎○　ガスと強風のため沈殿と決定するが、昼の交信で涸

沢岳西稜隊より「笠ケ岳方面、晴」との連絡。さらに穂高小屋に向うとの連絡があったので、中野、宮本はこれに合流すべく雪洞を出発。やや明るくなってきたが、風はなお強い。現役2名は、これを見送った後、雪洞の改修をしたりして時を過す。夕方、OB隊集結の報を聞き、この合宿のキーポイントが達成されたことを喜ぶ。次は我々の番だ。2名では大きすぎる雪洞の中で、なんとなく落ちつかない一夜を送った。

1月1日 ◎　冬型気圧配置にかかわらず部分的に晴間を見る。風は相当強いが、元日アタックと勇んで、早々に雪洞を出る。

滝谷側から松濤岩を巻き、南峰に上がる。

C沢上部にさしかかると猛烈な吹き上げをくらい、瞬時にして目出帽をかぶった顔がひきつり、ピッケルを握る手の感覚がなくなった。そそくさとドームの風下に飛び込み、一息ついて交信する。穂高小屋のOB隊と今日の行動を確認し合い、やっと陽の当たり出した稜線を涸沢コルへと下る。リッジを忠実に辿ってクサリ場を過ぎると大きく切れ込んでいる。陽の当たらない滝谷側へ下っていくとC沢右俣上である。ここは不安定な雪の斜面をトラバースする。風の通り道であるのに、雪のなじまない急斜面で、全くいやな所だ。吹き上げで確保者の方がつらい。一度稜線に逃れるが、すぐ下へと追いやられる。ザイル3Pでこれを脱し、涸沢コルへと下る。

コルより夏径どうしに快適に登る。涸沢槍で一息つき、涸沢岳を見上げる。えらく急だ。涸沢岳直下は雪をだましながらのトラバース。そしてクサリ場を抜ければピークである。奥穂がやっと目の当たりに見える。しかし先程から天気がくずれ始め、笠ケ岳には暗い雲がかかり、蒲田からガスがはい上がってきてもうすでに越え始めている。追われるように、しかし心では落ちつけ落ちつけと言い聞かせて穂高小屋に下る。完全にガスに包まれ風は増々強くなる。しばらく待つうちに上空がやや明るいのに気がつく。もしやと思って奥穂への登りにかかる。アイゼンをきしませて急いで頂に立つ。やはり上空は晴れており、西穂方面はガス一つない。丁度ガスの切れ目になっているのだ。

ジャンダルムに続くトレースが美くしく、ここで引返すのはなんとも残念だ。ジャンに別れを惜しみつつ早々に下る。涸沢岳は、そのシルエットがようやく見える程度で、天気の悪い方へ帰るのはなんともいやなものだ。穂高小屋で大休止とする。ザイテンからの登山者が頻繁にやってきて、結構にぎやかだ。充分休んでまたザイルを結び合う。涸沢岳に登るとすごい風だ。奥穂とここととでどうしてこれだけ違うのか。慎重に確保して下り始めるが、トレースに従がって案外楽に下りる。涸沢コルからまた滝谷側のトラバースが始まる。往きのトレースはすでになく、少し下にルートをとる。雪は全く信用出来ず、ツアッケで岩をさぐりながら渡る。これを過ぎればもう北穂は近い。存分に稜線を楽しみながら、ドームを過ぎ、なつかしい雪洞に帰り着いた。いつしか晴間も見られるようになり、北尾根がその美くしい姿をちらつかせてくれた。

北穂（６：５０）ー涸沢コル（８：５０）ー（１０：３５）奥穂高岳（１０：４５）ー（１１：１０）穂高小屋（11：45）ー（2：40）北穂高岳。

1月2日 ○　早朝、星を見て好天を知る。しかし明るくなるとガスがでてきて、視界は至極悪い。例によって上空は晴れており、とても明かるいが、ＢＣからの指示で天気持ちとする。9時の交信時には、見事に晴れ上がっていた。早速出発とする。北壁の下りは完全なトレースがあり問題なく下る。Ｂ沢上のナイフエッジから横尾側にアブザイレンで下り、雪壁のメラバース。やはり雪が軽るすぎて不安定な１Ｐであった。クサリ場を下りナイフエッジ。切戸の底が真下に見下せる馬の背からつるべ式に一気に下ると、そこは陽のさんさんと照る最底鞍部。走るようにしてクラストした大切戸を進む。そのうちＢＣで手を振っているのが見えるようになった。風の音が彼等の声のように聞こえる。気分のよい所で昼食とする。この間にＢＣは南岳小屋への移動を開始する。ハシゴで始まる南岳の登りは雪が非常に安定しており快い。最後はクラストした斜面を一気に上がりＢＣに着く。互いの無事を祝って握手を交す。

北穂（9：45）ー（2：25）南岳ＢＣ。

1月2日 ○　またもや快晴。西稜を下山するという関大二部山岳部と再会を約し別れる。一路槍ケ岳を目指し、全員の足並は軽い。蒲田側は程よくクラストしており、夏よりはるかに歩き易い。広々とした稜線だ。中岳を越せば槍は目前、大喰岳では、人が鈴なりになった姿を見せつけられる。なんだかもう下山してしまったような錯覚を覚える。飛騨乗越に荷を置き、槍の穂に向う。肩の小屋は大変な賑いだ。小屋からは三々五々穂先に向う行列が続いている。その中に入って頂を踏み、高瀬川流域あたりをじっくりと見て下る。乗越からは一気に駆け降りる。膝まで没する雪だが安定しており、痛快な下降である。トレースは幾条もあった。下り終えるとボブスレーのコースもどきのトレースがついている。汗が吹き出すのをがまんして、槍平まで頑張る。予定では今日はここ泊りであるが、最終バスに間に合いそうなので、昼食もそこそこにまた走り出す。またたく間に新穂高温泉に着いてしまったが、ロープウエイに乗ろうと行列を作っている人々は、我々を異様な目で見ていた。

（記　苗村）

涸沢岳隊（ＯＢ隊）

１２月２９日夜、大阪を発つ（和田、鈴木、山内）。３０日、新穂高温泉より涸沢岳西稜に取付く。久かた振りの雪径に汗を流しつつ、2,４００Ｍにツエルトを張る。

３１日　晴天の中を涸沢岳をめざし、昼に南岳南西稜隊に加わった中野、宮本の北穂高キャンプと交信出来、本日中に、穂高小屋で合流することを決定する。涸沢岳西稜からの我々３名は１６時、北穂からの２名は１６時半にガスと強風の中を、穂高小屋で合流し、小屋の中にツエルトを張って大晦日の夜を楽しむ。

１月１日、晴のち曇　８時、穂高小屋を出発して西穂へと向う。初陽に山々は輝やいているが風強く、気温も低い。奥穂高岳頂上で、宮本ー鈴木、和田ー山内ー中野とザイルを結び、馬の背、ロバの耳とスタッカットをまじえて、コンテニュアスで進む。ロバの耳では、西穂高からのパーティに１時間程待たさ

れた上に、完全にガスに包まれてしまい、身体は冷えきってしまう。

午後より、雪もちらつきだし、視界を閉ざされた中を、岩カゲに小休止をとりつつ、今日中に西穂高を越してしまおうと先を急ぐが、間ノ岳のコルで16時30分になってしまい、やむなく雪洞を堀ることにし、行動を打ちきる。正月ともなれば、この厳冬の穂高も、人の往来多く、度々の時間待ちはロスが大きい。

1月2日　晴　8時雪洞出発。昨日と同じザイルシャフトで西穂へむかう。コンテニュアスで登り下りを続けると、10時、西穂高頂上に着く。せまい頂上は人とテントで足の跡み場もない頂上下で、ザイルをはずし、晴天の北屋根上高地を眺めて、大休止、全員食欲旺盛。再びザイルを結び、西稜の下りにかかる。岩稜を2ケ所、ゆっくりと下り、太尾根をダラダラと行くと、大きなコルにでる。コルへの下りは急斜面となっており、スタッカットで2ピッチで降りて、ザイルからやっと解放される。後は、細い雪稜を辿り、南西稜とのジャンクションをすぎていくと、尾根は次第に太くなっていく。下るにつれて、風もおさまり、正月の陽をうけて、のんびりといく。長い樹林帯をぬけると、白出沢の出合であった（15時）。南岳の現役隊と交信をすると、奥穂高のアタックも無事終えて、集結したとのことで安心する。2時間で新穂高温泉に着きこの夜は蒲田温泉泊まりとする。OB5名の山行をやり終え、温泉と美酒は、今生の喜こびであった。